人称代名詞の格変化不可能性と ファティック機能

――バンヴェニスト・フッサール・マリノフスキー ――

Personal Indeclinability and Phatic Function

木下　聖三

目次

1．主体としての私
2．私の世界あるいは私に対する世界
3．一人称代名詞の格変化不可能性
4．二人称代名詞の格変化不可能性
5．人称代名詞のファティック機能
参考文献

私という語の主体として使用を突き詰めると、エトムント・フッサールのいう「格変化不可能性」とブロニスロー・マリノフスキーのいう「ファティック」機能に逢着する。これらこそエミール・バンヴェニストの定義した人称代名詞の性質なのである。以下で子細を見ることにしよう。

1．主体としての私

私は以前「何人も主体としての私を指し示すことはできない」と述べたことがある。「なぜなら、それは語り出した途端、客体としての私と化してしま

うのだから」（木下「独我論―自己指示の不可能性―」［2004：81］）。このとき、私はルートヴィヒ・ウィトゲンシュタインが『青色本』で展開してみせた議論を念頭においていた。

〔主体としての使用の場合の〕「私」という語は、たとえ私がL.W.であるとしても、「L.W.」と同じ事を意味しはしないし、「今しゃべっている人」という表現と同じ事を意味しもしない。しかしこの事は、「L.W.」と「私」は別のものを意味している、という事を意味してはいない。これらの事の全体は、これらの語は我々の言語における異なった道具である、という事を意味しているのである。

（ウィトゲンシュタイン『青色本』［2001：115］）

ローマン・ヤーコブソンの言葉を借りて、いま少し分析的に換言するならば、「私」という語は、単にL.W.を指示する「指標」indexであるだけでも、単に「今しゃべっている人」という意味を有する「象徴」symbolであるばかりでもない、「指標にして象徴」indexical symbolなのであり、この二重性こそが転換子たる人称代名詞の性質だ、という話になろう（ヤーコブソン『一般言語学』［1973：152-153］参照）。

同じ事態を、永井均はいわば裏側から（むしろ「真正面から」というべきか）なぞっているように、私には思える。

〈私〉という表記（今後それを「独在性のわたし」と読むことにしたい）には、二重の否定が込められている。第一に、それは一般概念としての「私」を意味するのでなく、第二に、それは「私」と発話する当の人物を指示するのではない。（その意味で山括弧（〈　〉）とは抹消記号（×）の変型なのである。）かつて私は、前者のような捉え方を「私」概念依拠型の〈私〉把握と呼び、後者のような捉え方を人間実在依拠型の〈私〉把握と呼んだ。

（永井『〈私〉の存在の比類なさ』［1998：134］）

ここでは、「指標」でも「象徴」でもない（としか言いようのない）ような〈私〉という語の使用が見られる。永井はそうは言っていないけれども、ひょっとすると、この（「指標」でも「象徴」でもない）〈私〉こそは、バンヴェニストが定義するところの人称代名詞なのではないか。

> わたしがわたし〔という語〕を用いるのは、わたしがだれかに話しかけるときだけであり、そのだれかはわたしの話かけのなかであなたとなる。この対話の条件こそまさに人称を構成するものなのである。
>
> （バンヴェニスト『一般言語学の諸問題』［1983：244］）

> これらの代名詞は、言語が分節するあらゆる指称 désignations から次の点で区別される。すなわち、これらは、一つの概念にも、一つの個人にも関係しないのである。
>
> （バンヴェニスト『一般言語学の諸問題』［1983：246］）

> わたしは、《わたしという言語上の現存を含むいまの話の現存を言表する人》である。したがって、《話しかけ》の状況を導入して、あなたに対しても対称的に、《あなたという言語上の現存を含むいまの話の現存において話しかけられる人》という定義が得られる。これらの定義はわたしとあなたをことばの範疇としてとらえたものであって、ことばにおけるそれらの位置づけに関係している。われわれはここで、特定の言語におけるこの範疇の特有の形を考察しているのではない。これらの形が話のなかで明示的に現われようと、あるいはそこに陰伏的にとどまろうと、それはあまり問題ではないのである。
>
> （バンヴェニスト『一般言語学の諸問題』［1983：236］）

「現存」instance は、コンピュータープログラミング（オブジェクト指向言語）の文脈では「インスタンス」と音訳される。《わたしという言語上の現存》もおよそこの意味におけるインスタンスであり、これは指標にして象徴

である（客体としての）「私」に相当しよう。「話」のインスタンスの中に、この「私」のインスタンスも含まれているというわけである。

他方《いまの話の現存を言表する人》の方は、指標でも象徴でもない（主体としての）〈私〉であろう。「現存」instance が裁判用語としては「審級」と訳されることに留意しつつ、「話の現存」という概念について、一字一句の台詞のみならず、いわば吹き出し全体をイメージするならば、それは視覚における視野のようなものであり、対する〈私〉は視覚における視点ないし視座のようなものであろう。この目で視点を見ることができないように、この口で〈私〉に言及することもまた、かなわないに違いないのである（言及可能であるように思えるのは、ことごとく客体と化した「私」であって、主体としての〈私〉ではないのである）。

2．私の世界あるいは私に対する世界

言語学は「私」という語の客体としての使用も俎上に載せねばならないから、指標にして象徴である「私」から指標でも象徴でもない〈私〉まで、バリエーションが生じるのは当然であり、ヤーコブソンの定義とバンヴェニストの定義のずれも、その現われに過ぎないのだが、それだけに、フッサールに向けられたヤーコブソンの批判は、いささか狭量であるように思う。

> 人称代名詞やその他の転換子のもつ特性は、単一の、一定した、一般的意味の欠如にあるとしばしば信ぜられた。たとえば、フッサールは“ich という単語は場合場合によって別の人物を指すが、それは、その度ごとに新しい意味によって、このことを行なうのである”と言っている。このような脈絡的意味の多様性があるとされたゆえに、転換子は象徴とは違って、単なる指標として扱われた。しかしながら…。
>
> （ヤーコブソン『一般言語学』[1973：152-153]）

ヤーコブソンに言わせると、フッサールの人称代名詞観は片手落ちだとい

うわけだが、当のフッサールの関心はむしろ、指標でも象徴でもない〈私〉の方に向かっていたのではないか。

> …世界現象―それは、わたしの判断中止においては、もっぱらわたしの世界現象である…。わたしが判断中止において到達する自我、すなわちデカルト的概念を批判的に解釈し直し、改良することによって「われ」といわれているものは、本来ただ曖昧に「わたし」と呼ばれているにすぎない。もっともそれは、本質的な曖昧性なのであって、それというのも、わたしが反省しつつそう名づけるばあいには、次のような言い方をするほかないからである。〈世界、すなわちその存在としかじかであるあり方においていまわたしに妥当している世界、わたしが完全に確信している人間のすべてを含んでいる世界を現象として問題にしているのは、わたしであり、判断中止を遂行しているわたしである〉と。したがってわたしは、わたしにとって意味をもっているすべての自然的な現実存在を超えており、さしあたって世界に〈わたしに対する世界〉という意味を純粋に与えている超越論的生の自我極であるようなわたしであり、その完全な具体相において考えれば、これらすべてを包括している自我なのである。
>
> （フッサール『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』［1974：264］）

この記述からは、ウィトゲンシュタインの『論考』の一節が思い起こされる。

> 5.63　私は、私の世界（小宇宙）［そのもの］である。
>
> 5.631　思考し表象する主体は、［世界の中には］存在しない。もしも私が『世界―それを私はいかに見たか―』という本を書いたとすれば、そこにおいて私は、私の身体についても述べねばならないであろうし、そのどの部分は私の意志に従い、どの部分は私の意志に従わないか、等々についても、言わねばならないであろう。これが即ち、主体を分離する一つの方法、或いはむしろ、或る重要な意味におい

て主体は［世界の中には］存在しない、という事を示す一つの方法、なのである。と言うのは、この本においては、主体についてのみ、言及される事がないのであるから。

5.632　［思考し表象する］主体は、世界には属さない；それは、世界の一限界なのである。

5.641　…自我は、「世界は私の世界である」という事を通して、哲学に入り込む。哲学的自我は、人間ではない、人間の身体ではない、或いは、心理学が扱う人間の心ではない；それは、形而上学的主体であり、世界の―部分ではなく―［超える事のできない］限界なのである。

（ウィトゲンシュタイン『論考』［2001：113］）

指標でも象徴でもない〈私〉は、世界の中には存在せず、ただ「〈私〉の世界」あるいは「〈私〉に対する世界」というような仕方で存在するのであろう。

3．一人称代名詞の格変化不可能性

フッサールは続けて、こう述べている。

…わたしの判断中止の自我としての根源我―それはその唯一性と人称変化をしないという性質を決して失うことはない…。

（フッサール『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』［1974：265］）

この「原自我（根源我）」Ur-ich の「格変化不可能性（人称変化をしないという性質）」Undeklinierbarkeit について、田口茂が敷衍している。

「人称的格変化不可能性」とは、人称代名詞の意味に関するエポケーをさらに徹底化したものと考えることができる。つまり、そこで ich と言われる

としても、それはまだ一人称・二人称・三人称等の区別（du や er などとの区別）に組み込まれていないだけでなく、ich が nir や mich に格変化することさえない。そのような格変化は、すでに私自身を対象化する視点を含んでいる。このような自己相対化の可能性さえ、括弧に入れられるのである。

（田口『フッサールにおける〈原自我〉の問題』［2010：124］）

次に田口は、エマニュエル・レヴィナスによる用語法との対照を見ていく。

…それ〔「私」の「格変化不可能性」〕をレヴィナスは、「対格」として理解している。「格変化不可能性」とは、もともとフッサールによって用いられた術語であり、レヴィナスはこの語に一定の改変を加えつつ自らの用語として各所で用いている。

（田口「『私』の定義としての『身代わり』」［2012：217］）

この語〔「格変化不可能性」〕は、フッサールにおいては、いかなる自己対象化・自己反省にも先立つ「主格」としての ich の格変化不可能性として解釈できる。

（田口「『私』の定義としての『身代わり』」［2012：218］）

フッサールにおいて、それは主格としての ich の格変化不可能性であり、レヴィナスにおいては、対格としての me の格変化不可能性である、というわけである。田口が参照しているレヴィナスの言葉を一部引いておく。

主体性は、その自同性のうちに主格として定位された自我ではない。…主体性は、一種の対格として、そもそもの初めから責任を負わされ、この責任を回避することができないのだ。

（レヴィナス『存在するとは別の仕方であるいは存在することの彼方へ』［1990：163］）

前－反省的、非－志向的な意識を、受動性の意識を持つこととして記述することはできない。そうであれば、その意識のなかで、ある主体の反省作用が、すでに自己識別しており、いわば「曲用しない主格」に自己措定しつつ、おのれが存在する権利を保障されており、非－志向的意識の気後れを、乗り越えるべき精神の幼年期として、あるいはひ弱さから安定した精神現象への移行過程として「統御」しているということになってしまうからである。非－志向性とはなによりもまず受動性であり、いわば対格がその第一「格」なのである。

（レヴィナス『観念に到来する神について』［1997：309-310］）

ここでもフッサールの見方は（ヤーコブソンによってもそう扱われていたように）矮小化されているように思う。というのも、先に見たように、フッサールはかなり注意深く、〈私〉は「〈私〉に対する世界」というような仕方でしか存在しない、と言っていて、フッサールにおいても、〈私〉は対格にとどまっているように思えるからである。

本邦でも、たとえば岡一太郎が長井真里や木村敏の中動態論を引きながら、「与格的自己」という術語に触れている（岡「偶然・自己・自然」［2013：82］）。私見では、原型が対格か与格かはたまた属格かは問題でなくて（それが対格を取るか与格を取るか属格を取るかは言語によって異なるし、そのうちのいずれか同士が同型である言語もある）、そこから格変化させてしまう（典型的には主格として定位させる）と、〈私〉はたちまち見失われてしまうことが問題なのである。

田口はレヴィナスとともに、「対格」accsatif に「告発」accusation という原義を読み込んで、次のような解釈を提示している。

「告発」と「出廷」は、「身代わり」の構造を考えるための新たな手がかりとなる。裁判官や弁護士は交代可能だが、告発され召喚されて法廷にいるものが、他の誰かと取り替え可能であるということはありえない。これとのアナロジーで、〈「主格」としての自我は交換可能だが、「対格」accusatif

としての「告発されたもの」accusé は交換不可能である〉ということも理解できる。

（田口「『私』の定義としての『身代わり』」［2012：219］）

これはしかし（アナロジーであるとはいえ）いささか乱暴な推論ではないか。裁判官や弁護士はそもそも交代可能な役割であり、被告人（ないし被告）とて、論理的には（あらゆる可能世界の中においては）交代可能な主体であるばかりでなく、現実にも解離性人格障害に罹患していたかどうかは争点となりうる。これらの、いわば世界の中の諸事情と、世界の限界における〈私〉が〈私〉でしかない事態とは、どこまでも位相が違うのではないだろうか。田口は、世界の中で対象化された「私」と、世界の限界において対象化しえない〈私〉を混同しているように思う。

そうではなくて、田口は（世界の限界における〈私〉の）論理的交換不可能性と（世界の中の「私」の）論理的交換可能性のセットについて、（被告人ないし被告当人の）現実的交換不可能性と（裁判官や弁護士という役割の）現実的交換可能性のセットでもって、類比的に語ってみせたということなのかもしれない。

4．二人称代名詞の格変化不可能性

ここで、バンヴェニストによって定義されるところの、もうひとつの人称代名詞、二人称のそれをめぐる事態についても、見ていこう。

わたしは、別の一人物を設定している…。それは、《わたし》に対しては外部にありながら、わたしのこだまとなり、わたしがあなたと言いかけ、わたしにはあなたと言う人なのである。…《我》はつねにあなたに対して超越的立場に立つが、しかもこの二つの項はいずれも、もう一方がなければ、考えられない。両者は、相補的でありながら、《内在／外在》の対立に従い、かつ同時にまた互いに反転可能である。

（バンヴェニスト『一般言語学の諸問題』［1983：244-245］）

永井は（そう明言していないけれども）バンヴェニストの定義を踏襲している。

> 第二人称とは（第三人称である客観的世界の成立とともに）その存在が認められた他の第一人称のことであり、それを最初の第一人称の側から捉えた場合の規定であるといえる。だからもちろん、単独者が「他者」に出会うとすれば、それは第三人称としてではなく第二人称としてであらねばならない。すなわち、対象的に（＝自分が見たり触れたり想像したり思考したりする対象として）ではなく、対称的に（＝そうした対象的なものごとを自分と同じように見たり触れたり想像したり思考したりする同型の他の主体として）であらねばならない。それは、私の語る「私はあれをこう見る」に対して、同じ「私」を使って「いや私はあれをこう見る」と語る者である。たとえ実際にはそう語り合わなくとも、そのことの可能性の内に示され合う者である。
>
> （永井『独在性の矛は超越論的構成の盾を貫きうるか』［2021］）

山括弧を用いる永井の表記法に倣ってパラフレーズすると、主体としての〈私〉は他の主体としての〈あなた〉に対して超越的である。他の主体としての〈あなた〉は〈私〉同様、世界の中には存在しない。したがって、言及することもかなわない。〈私〉が「〈私〉の世界」あるいは「〈私〉に対する世界」というような仕方で存在するのと同じような仕方でしか存在しない、彼方の〈あなた〉に対しては、レヴィナスによれば、ただ呼びかけることしかできないのである。

> 他者を知り、他者に到達するという大いなる希求は、言語という関係のうちに潜り込んだ、他者との関係において実現される。こうした言語の関係は呼びかけであること、呼格であることをその本質とする。他者は呼びかけられるや否やその異質性のゆえに維持され確実なものとされる…他者が捕縛され、傷つけられ、強姦されるときでも同様であり、他者は《尊重さ

れて》いる。この呼びかけられたものを私が理解するのではない。すなわち呼びかけられたものはカテゴリーに分類されることはないのである。

（レヴィナス『全体性と無限』［2006］）

「呼格で」。一人称代名詞たる〈私〉がそうであったように、二人称代名詞たる〈あなた〉もまた、格変化させてしまうとたちまち見失われてしまうものなのであろう。

5．人称代名詞のファティック機能

永井が提示した「私の語る『私はあれをこう見る』に対して、同じ『私』を使って『いや私はあれをこう見る』と語る」という型は、原理的にすべての「話」に備わるわけだが、「いい天気ですね」「そうですね」というやり取りこそが、その典型であろう。

こうした情報量ゼロのやり取りこそは、マリノフスキーが「ファティック・コミュニオン」phatic communion と呼んだ、言語使用の型であり、ヤーコブソンもバンヴェニストもこのコンセプトを引き継いでいる。

メッセージの中には、伝達を開始したり、延長したり、打ち切ったり、あるいはまた回路が働いているかどうかを確認したり…、話し相手の注意を惹いたり、相手の注意の持続を確認したり…するのに主として役立つものもある。この接触への指向、マリノウスキ Malinowski の術語を借りれば交話的機能 phatic function は、儀礼化したあいさつのおびただいやり取りや、会話をひきのばすことを唯一の目的としただらだらした対話などに現われる。

（ヤーコブソン『一般言語学』［1973：191］）

個人間のコミュニケーションは頻度が高く、実際的有用性があるわけだが、これだけが注目されて、対話が行われるのはその必要があるからだ、と片

づけられてしまうことが多く、対話の多様な側面が分析されないままになってしまうのである。ところで、その側面の一つは、あまりに月並みなのでその存在がほとんど認識すらされていないある社会的条件の中に現れる。B. マリノフスキーは、これを言語交感という名のもとに指摘し、言語に現れた心理社会的現象であると説明している。

（バンヴェニスト『言語と主体』［2013：86］）

次いで、末永朱胤が「話し手の現前そのものが交話的機能を遂行する」（「人称論としてのバンヴェニスト」［2011：156, 164］）、江口祥光が「二つの『人称』記号、『私・君』は、同時にまた『ファチック』記号でもある」（「『人称』を巡る二つの理論」［2012：91］）として、狭義の人称代名詞に備わる「ファティック」機能を説いているけれども、「ファティック」機能は挨拶の本義である以上に、むしろ狭義の人称代名詞の本義なのだろう。

レヴィナスの言うように、〈私〉と〈あなた〉とは隔絶している。

対話においてはまた「我」と「汝」のあいだに絶対的な距離が穿たれる。両者はその近接性という表現不能の秘密によって切り隔てられており、「我」として「汝」としてそれぞれの種属において独自であり、互いの関係においていかなる共通の尺度ももたず、なんらかの合致が果たせるような共通の領域も持たない絶対的な他者である（ここで「表現不能の秘密」と言うのは、ただ現前化によってのみ私が接近しうるような種類の秘密、すなわち他なるものとして他なるものが実存するモードのことである）。

（レヴィナス『観念に到来する神について』［1997：258-259］）

超越とは対話（dialogue）という語の「……から離れて」（dia）のことだ。

（レヴィナス『観念に到来する神について』［1997：264］）

そして、それゆえ「交感」を希求する。マリノフスキーがこう述べていた。

単なる愛想としての言語の機能を論ずるとき、われわれは社会における人間の性質の根本的な様相に触れるようにわたしは思う。すべての人間には、集合し、一緒になり、同居を楽しむ傾向のあることは周知の事実である。恐怖心、健和樹のごとき多くの本能や内在的性向、および功名心、虚栄心、権勢富貴を求める熱情のごときあらゆる種類の社会的情操は、他人がただ側にいることを必要条件とする基礎的性向〔the fundamental tendency〕に依存し、またそれと関連している。

（マリノフスキー「原始言語における意味の問題」[1967：405]）

わたしは〔基礎的性向 the fundamental tendency という表現を用いて〕わざと群衆本能（Herd-instinct）なる表現を避けた。何となれば、いま問題にしている傾向は厳密にいえば決して本能（instinct）ではないからである。

（マリノフスキー「原始言語における意味の問題」[1967：430]）

（狭義の）人称代名詞は、群れる動物としての「本能」ではなく、人間の「他人がただ側にいることを必要条件とする基礎的性向」の現れなのだろう。

参考文献

ウィトゲンシュタイン（Ludwig Josef Johann Wittgenstein）

2001『「論考」「青色本」読解』（黒崎宏訳解説）産業図書

江口祥光

2012「『人称』を巡る二つの理論 ――バンヴェニストとクルシル――」『Azur』13

岡一太郎

2013「偶然・自己・自然」木村敏・野家啓一監修『「自己」と「他者」』河合文化教育研究所

木下聖三

2004「独我論―自己指示の不可能性―」『常民文化』27

末永朱胤

2011「人称論としてのバンヴェニスト」『Mélanges：井原鉄雄中央大学教授退職記念論文集』

田口茂

2012「『私』の定義としての『身代わり』」『現代思想３月臨時増刊号総特集レヴィナス』

永井均
1998『〈私〉の存在の比類なさ』勁草書房
2021『独在性の矛は超越論的構成の盾を貫きうるか 哲学探究 3』春秋社
バンヴェニスト（Émile Benveniste）
1983『一般言語学の諸問題』（岸本通夫監訳）みすず書房
2013『言語と主体 一般言語学の諸問題』（阿部宏監訳）岩波書店
フッサール（Edmund Gustav Albrecht Husserl）
1974『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』（細谷恒夫／木田元訳）中央公論社
マリノフスキー（Bronisław Kasper Malinowski）
1967「原始言語における意味の問題」オグデン／リチャーズ『意味の意味』（石橋幸太郎訳）ぺりかん社
ヤーコブソン（Roman Osipovich Jakobson）
1973『一般言語学』（川本茂雄監修）みすず書房
レヴィナス（Emmanuel Lévinas）
1990『存在するとは別の仕方であるいは存在することの彼方へ』（合田正人訳）朝日出版社
1997『観念に到来する神について』（内田樹訳）国文社
2006『全体性と無限 下』（熊野純彦訳）岩波文庫